

聖なる者たちのための募金については、私がガラテヤの諸教会に指示したように、あなた方も行いなさい。私がそちらに行ってから募金が行われるようなことがないように、週の初めの日ごとに、各自収入に応じて、幾らかでも手元に蓄えておきなさい。そちらに着いたら、あなたがたの承認を得た人たちに手紙を持たせて送り出し、その贈り物をエルサレムに届けさせましょう。私も行くほうがよければ、その人たちは私と一緒に行くことになるでしょう。（Ⅰコリント16：1～4）

聖霊降臨によって、イエスをメシア（キリスト）と信じる信仰共同体（教会）が誕生した。この日に、三千人ほどの仲間が加わり、最初のエルサレム教会が形成された。この教会は、主イエスの再臨によって世の終わりがすぐに来るという終末信仰が息づき、原始共有生活で、主イエスが示された熱い愛で結ばれた共同体であった。周りの人々は信頼と尊敬をもって、日々、加えられていった。神殿当局は、あまりに大勢の人々が加わっていくことと、主イエスの復活を説いていることを危険視した。殊に、復活を否定するサドカイ派の人々は無視できないと思った。そのような時、ステファノの事件が起こった。最高法院で尋問を受けたステファノは、「いと高き方は人の手で造ったものにはお住みになりません（使徒言行録7：48）」と言い放った。神が住まうエルサレム神殿はユダヤ人の心の支え、誇りであったが、その神殿を否定したので、人々は激しく怒り、ステファノを石を投げて殺害した。エルサレム教会に集う者たちは、神殿を軽視し、ユダヤ人を律していた律法も無視する者たちであると見なされ、一気に迫害を受けるようになった。迫害は肉体的苦痛を与えるのは最終段階で、最初は生活権を奪うことから始まる。教会の信徒たちは生活に窮するようになった。この窮状は、パウロの耳にも届いたので、彼らを支援する募金活動を始めた。「聖なる者たちのための募金については、私がガラテヤの諸教会に指示したように、あなたがたも行いなさい」と呼び掛けている。「聖なる者たち」とは、言うまでもなく、エルサレム教会の信徒たちである。パウロは、エルサレム教会に対して特別な思いを持っている。ローマ書15章27節に「彼らは喜んで（募金に）同意しましたが、実はそうする義務もあるのです。異邦人（異邦人教会）が彼ら（エルサレム教会）の霊のものにあずかったのであれば、肉のもので彼らに仕える義務があります」と、初代のエルサレム教会から信仰の教えを受けたのだから、生活支援をする義務があると言っている。

「私がそちらに行ってから募金が行われるようなことがないように、週の初めの日ごとに、各自収入に応じて、幾らかでも手元に蓄えておきなさい」と、週の初めの礼拝日に献金を集め、万全の準備をするようにと勧めている。パウロは、マケドニアの諸教会にも募金を依頼していたが、コリント教会が用意できていなかったら、「私たちはこの計画のことで、恥をかくことになりかねません（Ⅱコリント9：4）」と、募金を競わせている。

集まった募金をエルサレム教会に、信頼できる人に手紙を持たせて届けさせるか、私が行ったほうがよければ、一緒に行くと言っている。事實は、パウロ自身が献金を届けるためにエルサレムに向かった。ところが、ファリサイ派の人々はパウロが自分たちを裏切って主イエスを信じ、宣教する者になったことに、殺意を抱いていた。エルサレム行きは危険であったが、あえて、行ったために捕縛され、ローマに送られ、そこで、殉教した。エルサレムに募金を届けたことが、パウロの殉教につながったのである。